

● シリーズ 私の見た日本 Vol.194

Chronicle of An Apprentice, Foretold. —希望を抱いて日本へ—

Srijon Barua (スリジョン・パールア)

1990年バングラデシュ・チッタゴン生まれ。2015年バングラデシュ工科大学建築学科卒業。卒業後、バングラデシュでさまざまな都市開発プロジェクトに関わる。2016年～2019年アジア太平洋大学ダッカ校にて講師を務める。2019年～現在、京都大学地球環境学舎人間環境設計論分野小林・落合研究室に在籍し、日本の高架下空間についての研究に取り組んでいる。



日本に向かう2日前の朝。ベッドで目が覚めたとき、これまで感じたことのない高揚感を覚え、期待に胸を膨らませた。この家で過ごすのはあと一日。これからの2年間は日本のアパートで過ごすのだ。バングラデシュの今いる部屋よりも、まだ見たことのない日本の部屋になぜか親近感を覚え、想いを馳せていた。実際に来日以降、日本のアパートの自室は時間の経過とともに、第二のふるさとのような場所になっている。日本に着いた日の朝は、これからどんなことが起こるのか全く想像もできなかつた一方で、その日からずっと、何らかの力が私に働きかけているように感じている。

はじめに、私にとっての日本、特に京都の第一印象から述べたい。このまちと、このまちの人々は優しい。京都のまちや人々を表現するのに最適な言葉は、優しさである。私は人口密度の高さや交通渋滞などの問題に悩まされているバングラデシュの首都ダッカから来たため、京都では人に対する優しさを感じた。路地、花屋、親しみを込めて「おじさん」「おばさん」と呼ばれる人、警察官でさえ、誰に対しても優しく振る舞う。言うまでもなく、日

本に来て間もない頃の桜の美しさは私の不安を吹き飛ばしてくれた。このまちはいつも優しさにあふれている。

次に、なぜ進学先に日本を選んだのか、日本の建築にどんな魅力を感じたのかについて述べたい。たくさんある進学先の選択肢のなかで日本を選んだのは伝統的な日本建築だけではなく、日本の近代建築やポストモダン建築は洗練されていて、ずっと魅了されていたからだ。おそらく私に最も影響を与えた建築家は、伊東豊雄と坂茂だろう。彼らのデザインへのアプローチは印象的で、作品の背景に何があるのかを考えさせられた。日本の建築からは静けさを感じられる。いつかは終わるとわかっていながらも、決して永久的なものではない一瞬を楽しむ、和のこころが日本の建築には表れている。例えば、日本人は花火や紅葉を愛でる。そして、日本人建築家が設計するとき、和のこころをもった日本人ならではの感性が表れる。だからこそ日本の建築には、自然への畏怖があるのだろう。

日本に興味をもったもう一つの理由は、都市のなかで小規模な再開発プロジェクトが重要な役割を果たしているからだ。具体的には、

日本の高架下空間の再開発プロジェクトが非常に興味深い。鉄道に関するプロジェクトにおいて日本は常に最先端にいる。私は大学生の頃から、インフラとその周辺における空間の質、都市の成長にずっと関心があった。バングラデシュにいたとき、インターネットで日本における高架下空間の再開発プロジェクトを知り、どのように始まり、運営されているかを知りたくなった。これが日本を進学先に選んだきっかけの一つである。バングラデシュではまだインフラを整備する段階にあるため、このようなインフラの再開発プロジェクトはあまり見られない。一方、日本ではすでに興味深いプロジェクトが確立されている。日本における高架下空間の再開発プロジェクトは、主にJRなどの鉄道会社を含めたデザインチームによって行われている。例えば、「黄金町バザール」(横浜市)、「nonowa東小金井」(東京都小金井市)、「mAAch ecute (マーチエキュート)神田万世橋」(東京都千代田区)、「2k540 AKI-OKA ARTISAN」(東京都台東区)、「BankART Station」(横浜市)などがある。これらのプロジェクトは、地域住民や地域コミュニティのニーズを反映しており、大変興味深い。黄金町バザールは、地域コ

ミュニティや大学教授、エリアマネジメントを行う団体を中心に、かつて違法風俗店が並んでいた高架下周辺の地域を芸術祭で活性化するというアイデアから生まれ、これにより、周辺の地域住民はこの地域に誇りをもつようになった。nonowa東小金井では、高架下の店舗に地元の農家や職人を誘致し、新しい地域コミュニティをつくった。2k540 AKI-OKA ARTISANは、JR秋葉原駅とJR御徒町駅の間にデザインされた高架下空間で、全国から職人を集め、海外からの旅行者や周辺の人々に向けて発信している。mAAch ecute 神田万世橋は、レンガ高架橋の歴史的価値を活かしてリノベーションされた商業空間だ。これらの例は高架下を活用した都市のあり方を示している。

安藤忠雄、槇文彦、藤本壮介、アトリエ・ワンなど有名な建築家がつくった美しい建築だけではなく、このような小規模な再開発プロジェクトにおける日本人のこだわりには私は魅了されたのだ。

最後に日本で建築を学んで感じたことを述べたい。日本の建築教育の質という観点では、国公立大学以外に建築を学ぶことのできる芸

術大学がいくつもあるのが特徴だ。バングラデシュでは、建築の学位を取得できる芸術大学はなく、建築は工学系の大学に属していて、土木工学を扱う学部とは異なった独自の学部である。バングラデシュの建築教育の質は比較的高く、国際的な賞を受賞している建築家や学生も増えている。著名な建築家の事務所は、世界中の建築事務所に引けを取らない。しかし、研究を軸とするアカデミアの建築教育と実務のできる人材を育てる建築教育を両立するカリキュラムがない。

私が日本とバングラデシュの両国において建築を学んで感じた大きな違いは、理論的な部分のほかに、日本では現場での実践的なプロジェクトを重視していることである。この点は、教育的であるだけではなく、道徳でもある。フィールドまで行き、地域住民とコミュニケーションを取り、作業工程を管理し、大工と協力して実際に利用されるものをつくる。このような過程から、建築に対するさまざま

な視点や、個人、土地、コミュニティがもっている価値観を学ぶことができる。また、多くの人と一緒に働くことは、助け合いにもつながり、ときに人の優しさを感じることもあるだろう。暑い夏の日の施工現場で、全く見知らぬ人から水を1本もらっただけでも感謝の気持ちでいっぱいになり、恩返しをしようという気持ちになる。それは、現に世界中で必要とされている助け合いの精神である。建築を学ぶ学生にとって、このような環境や経験はとても大切である。

日本に来る前に、大使館で日本人はとても礼儀正しいと聞いていた。日本に来て、道徳的価値観は幼い頃から教育の一環として教えられていることがわかった。今、日本のアパートでこの文章を書いているが、私の周りの人や息を呑むほど美しいこのまちのおかげで、この部屋は私の第二のふるさとのような場所になっている。

(翻訳: 京都大学大学院工学研究科建築学専攻 修士課程学生 間山碧人)



2k540 AKI-OKA ARTISAN



毎年高架下で開催される「黄金町バザール」



mAAch ecute (マーチエキュート) 神田万世橋



儂い紅葉